

## インタビュー

# SDGs 時代の家庭科教育実践

## ～お茶の水女子大学附属高等学校の挑戦～

2019年6月22日の朝日新聞に「高校生とアパレル アフリカ支援で協力」という記事がありました。お茶の水女子大学附属高等学校の「家庭総合」の授業で、エシカルブランド「CLOUDY (クラウディ)」と共同でチャリティ商品を開発したとのこと。附属高校の家庭科教諭 葎内ありさ先生にその背景などを伺いました。

### 🍃 家庭科について

家庭科というと、いわゆる衣・食・住のイメージが強い方が多いと思いますが、年金や金融資産、住宅ローンなども扱います。高校では男女共に学ぶ必修科目になって25年目です。昨年、新学習指導要領が発表され、「家族・家庭及び福祉」「衣食住」に加えて「持続可能な消費生活・環境」が一つの領域としてフォーカスされることになりました。これらを科学・政治・経済などの視点で見つめなおして、実生活の行動や技に生かしていくのが家庭科です。暮らしを工夫して創る、いわば幸せになるための教科です。

家庭科のもう一つの特徴として、50%を実習にする（話し合い等も含む）教科であることがあげられます。そのため、生徒が「自分事化（じぶんごとか）」して納得しやすく、各自のアクションにつながりやすい。他の教科、企業やNGOとの連携もしやすいと考えています。

### 🍃 エシカルと家庭科

一葎内先生は全国に先駆けて家庭科の授業で「エシカル」をとりあげたこの分野の第一人者。2015年に消費者庁が「倫理的消費」調査研究会を立ちあげた際には委員に任命されました。一

私が「エシカル (Ethical)」という言葉を知ったのは2011年です。「倫理的な」という意味で、良心にもとづいて、環境や社会貢献に配慮して行動すること全般を指します。当時はまだあまり知られていませんでしたが（認知度は6%程度）、私は、教員になってすぐの頃から授業で児童労働やフェ



葎内ありさ（よしうち・ありさ）

お茶の水女子大学附属高等学校教諭、同大学非常勤講師。お茶の水女子大学生活科学部卒業、同大学院博士前期課程修了後、教員となる。その後、慶應義塾大学法学部を卒業。「家庭科は法を扱う機会も多いため、全体像を把握して教えたい、と思いました」。2010年より現職。文部科学省検定教科書編集委員。エシカル消費の国内外の研究調査を行う。

#### 【主な研究業績】

○英語論文（単著）

YOSHIUCHI, Arisa,(2017).Learning about Ethical Fashion in Home Economics Classes:

Experiences, Lectures, and Information Technology as Tools for Consumer Education,International Journal of Home Economics , Vol.10(2), 64-76. 査読あり 他

○海外研究調査訪問先

仏パリエシカル・ファッションショー、カンボジア、米ポータランド、フィンランド、デンマーク、スリランカ、インドネシア 他

○平成25年度・26年度文部科学省委託事業「消費者教育推進のための調査研究事業」（エシカル・ファッションを通じた消費者教育推進事業）

○科学研究費補助金（奨励研究）

「倫理的消費＝エシカル・ファッションを用いたアクティブ・ラーニングの消費者教育研究」（2014～2016,2018年）

○著作

共著(2017),『アクティブ・ラーニングが育てるこれからの家庭科』地域教材社 他

アトレード、環境問題等を扱っていましたが、それまで自分のやってきたこととも合うし、家庭科とリンクさせるのにいいなと考えました。そこで、その年の附属高校の公開教育研究会を「エシカル・ファッション」で行ったところ大変好評でしたので、毎年、手法を変えて研究し、国内外の調査と教育実践をつなげています。

2015年にSDGs<sup>\*1</sup>が国連で採択され、エシカル消費やESG投資<sup>\*2</sup>がその具体的な行動であるため、エシカルに注目が集まるようになりました。現在は家庭科の教科書にも載っています。

\*1 Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)

\*2 企業の財務情報だけでなく、環境 (Environment)・社会 (Social)・企業統治 (Governance) に関する取組みも考慮した投資。

## 「体験しながら学ぶ」ことが大切

2011年から、高校1・2年生の「家庭総合」でエシカルを扱っています。はじめのうちは2年時のみでしたが、1年時に導入を行い、スパイラルに繰り返す方が効果的であることが分かり、この3年間はそうにしています。

エシカル消費には「フェアトレード」「オーガニック」「産地支援」「社会的弱者支援」「伝統工芸」「リサイクル・アップサイクル」「アニマルウェルフェア」などさまざまなカテゴリーが含まれますので、その中のいくつかに関連する題材を扱い、「体験しながら学ぶ」ことを大切にしてきました。単に教えられるだけでは納得いかないことも、体験を通して「楽しいな」とか「いいな」と感じると、胸に落ち、自分事化につながると考えています。

例えば、徳島の藍染め職人さんにご協力いただきながら、完全天然製法の藍染めにチャレンジした年もありますし、知的障がい者や高齢者の社会参加の手段にもなっている「さをり織り」をとりあげた年もあります。藍染めの手ぬぐいやさをり織りを生徒が制作した天然素材のシャツとアレンジし、班ごとにファッションカタログやプロモーション動画を作らせ、それを見比べながら商品を選択する視点や適正価格について考えました。また、動画メッセージやビデオ通話を利用して、藍染め工房や福祉施設の方々と交流する時間も設けました。生徒は、「藍染めっておじいちゃん、おばあちゃんのものだと思っていたけど、おしゃれで楽しい」と感じたり、あまり接する機会がなかった知的障がい者の方が自分たちの作品を見て喜んでくださる様子を目の当たりにして、親近感やそれまで自分の中にはなかった感情が生まれたようでした。

## 外部との連携

このように外部の方やプロに入っていただくのはとても意味があると考えています。「霞内先生が何か言っているけど本当なのかな？」と思っている生徒たちも、「実際にやっている人がいるんだ」と納得します。

これまで様々な企業や官庁、NGOなどと連携をしてきました。コーヒー豆を運ぶ麻袋で作ったバッグが大人気のエシカルブランドと「一緒にアップサイクルの企画ができないか」と話し合っ、お茶高オリジナルのクラッチバックを作った年もあります。生徒の満足度が高く、身の回りのものをすぐ捨てずにちょっとリメイクしてみたくなったという声などが聞かれました。

ブランドとの連携を考える際には、デザイン性の高さや運営の背景を含め「生徒に響くかどうか」という点を重視します。今回紹介された、チャリティ商品の開発を一緒に行った(株)DOYAもそうです。代表取締役社長の銅冶勇人氏は大学の卒業旅行でアフリカを訪れたことをきっかけに、NPOを立ち上げ、アフリカンテイストを取り入れた高感度なファッションブランドCLOUDYを展開して、現地の教育・雇用の創出を支援している方です。

## 商品開発の経緯

家庭総合では、2年時に服を作るため、1年の3学期に基礎縫いの復習を行います。全員同じ物を作るのではなく、生徒自身が好きなものを考えて作って欲しいと思い、去年と今年は、CLOUDYから提供していただいた50cm×50cmのアフリカの布をひとり1枚ずつ配り、まつり縫い、ボタンつけ、ミシン縫いを必ず入れるという条件で、各自好きなように、商品のプロトタイプを考えてもらいました。できあがった全



2018年と2019年に附属高校の生徒とCLOUDYが共同開発したチャリティ商品

作品を、ブランドの方が中心となって、私も加わり、売りやすいか、量産に向かかといった観点でも検討し、昨年はミトンのセットとワンピース、今年は親子エプロンとエコバッグが選ばれました。生徒が書いた企画書、型紙をガーナの工場に送り、現地のスタッフが作ってくださったものを東京ミッドタウン六本木のイセタンサローネで販売したのです。

通常のチャリティ商品では、チャリティの割合が1%程度であることが多いのに対し、CLOUDYは10%なのです。販売前に銅冶氏が商品のサンプルを持って学校に来てくださり、生徒たちと一緒に話し合い、昨年は給食を、今年は同社がガーナで作る政府認可の中学校に教科書を送ることになりました。



2019年の商品には、ザンビアで作られたフェアトレードのバナナペーパー製のタグが付けられた。片面にはお茶高の校章が、もう片面には「この商品はお茶の水女子大学附属高等学校とCLOUDYの共同プロジェクトとして、高校生の商品企画をもとに、ガーナで生産されました。売上の10%がアフリカの子どもたちが学校で使用する教科書に還元されます」と印刷されている。

というイベントのコーナーを担当してもらいました。生徒が工夫を凝らしたファッションショーや児童労働や伝統芸術などを取り入れたエシカルクイズが好評でした。

2015年に、消費者庁が第1回「エシカル・ラボ」というシンポジウムを開催した際には、私が委員を務めていたこともあり、生徒たちがプレゼンテーションを行いました。倫理的消費に取り組む若者を紹介する「エシカル・メッセージ」というコーナーに登場した彼女たちは、「Everyone Enjoy Ethical」「エシカルは楽しくて、心豊かなことなのです」と発信しました。

さらに2017年には全校をあげて「エシカルな文化祭」を行いました。児童労働で亡くなった女の子の魂が眠るお化け屋敷があったり、間伐材を材料に障がい者雇用で作っているお箸を使ったり、TABLE FOR TWO<sup>\*3</sup>に参加したり…。「お茶高のお茶」というエシカル商品も作りました。これはお茶大公認サークル「Ochas (オチャス)」と、有機茶園の下堂菌が共同開発した商品を小分けにして、森林の持続化に配慮したFSC認証のラベル付きパッケージに入れ替えて販売し、売上を東日本大震災の被災高校生の奨学金として寄付したものです。これは日本初のFSC認証付き商品ラベルになりました。このように自分たちで様々な企画を立てて実行することを通して、生徒たちは、エシカルは難しいことではないし楽しい、ということに気づき、その後の文化祭にも受け継がれています。

\*3 対象となる定食や食品を購入すると、1食につき20円の寄付金が開発途上国の子どもの学校給食になるプログラム

## アウトプットを通して見えてくるもの

もう一つ、私が教育実践の中で大切にしているのは、学んただけで終わるのではなく、学びを人にアウトプットしていくことです。他者に伝達することによって自分事化していくのではないかと考えているからです。

エシカルに関するリーフレットを作ったり、ひとり1個エシカル宣言を考え、動画を作成したり、附属小学校・中学校に教えに行く機会を設けたりしています。総合的な学習の時間の探究活動へ発展させ、「ふくのはなし」(<http://fashion-story.jp/>)というWebサイトを作成したグループもあります(第18回全国中学高校Webコンテスト プラチナ賞・経済産業大臣賞受賞)。このサイトは今でもご覧いただくことができます。

様々な外部のイベントにも出演しました。2013年にはエコプロダクツ(日本最大級の環境展示会)の舞台をプロデュースする機会をいただき、生徒25名に「エシカル・ファッション最前線～10代・20代の考える未来のファッション～」

## 今後のお茶高家庭科教育

本校は2014年度～2018年度まで文科省「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」の指定校でしたが、それが終わり、今年度からは「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」となりました。2023年度までの5年間、「女性の力をもっと世界に～協働的イノベーターとイノベーションを支える市民の育成～」と題した研究開発に取り組みます。私は、そのコア科目の一つである「生活の科学」という家庭科の科目を担当することになりました。

もともと家庭科という教科はかなり科学的なのです。藍染めのお茶も、単に染めて終わりではなくて、どうして青くなるのか、酸化還元って何?という話もしました。持続可能な未来の実現には、エシカルな観点から最先端の科学技術を生かし、社会課題を解決していくことが必要です。エシカルを取り入れつつ科学的なものの見方を喚起する、サステイナブルなSSHの家庭科科目というのを今作っている最中です。

(2019年8月9日取材)